自分の考えを持ち，伝え合い高め合う子供の育成
～言語活動の充実を通して～

日置市立伊作小学校

1　研究のねらい

本校の学校目標は，「主体的に学び，心豊かで，心身ともにたくましく，夢実現をめざす伊作っ子の育成」で，三つの目指す子供の姿を設定し，日々の教育活動に取り組んでいるが，自分の思いを積極的に伝えようとする子供が少なく，発表の声も小さく，表面的な理解にとどまってしまう課題が見られる。

また，平成27年度から２年間，日置市「チェスト行けひおきっ子」事業において市研究協力校として体育科の研究に取り組み，平成29年度は，「自分の考えを持ち，伝え合い高め合う子供の育成～言語活動の充実を通して～」という研究主題の下，視点１「教科等における言語活動の工夫」，視点２「豊かな表現力を育む言語環境の工夫」という二つの研究の視点を立て，確かな学力を身に付けるために，基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力，判断力，表現力の育成などを目指してきた。

このようなことなどから，どの教科等においても主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して，基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるとともに，自分の考えを持たせ，伝え合い高め合う活動を通して，課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等を育むことが大事であると考えた。

2　研究の概要

研究主題の具現化を図るために，本校では次の三つの研究の視点を設定した。

視点１　主体的・対話的で深い学びの授業の創造

学校教育目標や研究主題の具現化を図るためには，毎時間の授業の改善・充実が最も大切であると考える。

視点２　学習環境の整備（家庭学習を含む）

子供の実態把握や学力検査結果等の分析，授業だけでなく学校教育全体による取組，家庭学習の充実や基本的生活習慣の定着など学習環境の整備も大事であると考える。

視点３　校内研究体制の確立

県教育委員会や鹿児島教育事務所，日置市教育委員会等の指導助言をいただきながら，効率的で望ましい校内研究体制づくりを目指していく。

3　研究の内容

視点１　主体的・対話的で深い学びの授業の創造

⑴　基本的指導過程の作成
⑵　学習のしつけの定着
⑶　ユニバーサルデザインの導入
⑷　言語活動の工夫
⑸　ＩＣＴ機器や教材の活用
⑹　基礎的基本的事項の定着

視点２　学習環境の整備（家庭学習を含む）

⑴　実態調査(アンケート)の実施
⑵　学力テスト等の結果分析と対応
⑶　授業外における言語活動の充実
⑷　読書活動の充実
⑸　家庭学習の充実
⑹　基本的生活習慣の定着
⑺　発表話型，板書・接続語カードの作成

視点３　校内研究体制の確立

⑴　模擬授業の実施
⑵　ワークショップ型授業研究
⑶　「学びの組織活性化」推進プロジェクト実践校としての取組

4　研究の実際

⑴　教室環境のユニバーサルデザイン

○机上の整理と情報の後方掲示
○机上には，筆箱は置かずに，必要な物（鉛筆等）のみを置く。

⑵　ペア学習，グループ学習

○個別学習→ペア学習→全体で発表・確認
○高学年では，司会を中心に進めている。

⑶　学校行事等における発表の場の設定

○表彰を受けた子供が感想や次の目標などについてコメントをする。

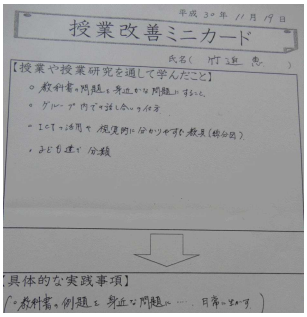
⑷　読書活動の充実

○１年生と６年生とのリーディングバディー（週１）
○各学年でのペア読書

⑸　模擬授業

○指導案検討と模擬授業を同時に進め，効率化を図る。

⑹　ワークショップ型授業研究



○二つのグループに分けて，成果・課題・改善点を付箋で視覚的に構造化する。

5　研究のまとめ

⑴　成　果

○　一単位時間の基本的な指導過程に基づいて授業を実践すると同時に，学習のしつけの定着を図ることで，子供が明確な課題意識を持ち，見通しを持って学習に取り組むことができるようになってきた。

○　子供に目的意識を持たせて，ペア学習やグループ学習に取り組ませることで，学びの深まりが見られるようになってきた。

○　学級ＰＴＡや学級通信等で，学校や学級での実践を伝えていくことで，家庭でも実践（日記等）していこうと努力する姿が見られるようになってきた。

○　ワークショップ型の授業研究を積み重ねることで，より活発に意見交換ができるようになり，日々の教育活動に活かされてきた。

⑵　課　題

▲　自分の考えを述べる時，理由や順序を表す言葉などを使えるようになってきつつあるが，個人差もあり，文がねじれたり，意味が伝わらなかったりすることもあるため，個別指導が必要である。

▲　小中一貫教育の視点から，９年間の系統性を考慮した家庭学習について，職員の研修を深めるとともに，家庭へも啓発していく必要がある。

6　今後の取組

○　小中一貫教育の実態（課題）から，９年間を見通した基礎学力・家庭学習などについて中学校とも更に連携して進めていく。

○　２年間の研究の成果と課題が明らかになったことを念頭に入れながら，継続できるところは継続し，子供の成長を見守っていく。